

# 琉球大学学術リポジトリ

## 高校生の高齢者理解に関する一考察： 高等学校での授業実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2017-05-08 キーワード (Ja): 高齢者, 高校生, 教育老年学, 高齢者理解 キーワード (En): 作成者: 下地, 敏洋, Shimoji, Toshihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/36568">http://hdl.handle.net/20.500.12000/36568</a>

# 高校生の高齢者理解に関する一考察

## —高等学校での授業実践を通して—

下地敏洋

### A Case Study on Understanding of the Elderly among High School Students: A Lesson from High Schools in Okinawa

Toshihiro SHIMOJI

#### Summary

This article aims at considering the possibility of introducing educational gerontology into Japanese high schools as a regular class based on the results of the questionnaire of the understanding of the elderly and the observation of the classes.

The classes were given to assess the understanding of the elderly through lectures and Palmore's Facts on Aging Quiz for students of three high school students in Okinawa.

The results show that high school students involved don't understand the real aging process and the elderly well. Attitudes learned early in the life stage have great influences in thinking and behavior styles toward ourselves and others. It is important for students to learn the elderly and the actual aging process because the actual aging process has variety, and it is based on individuals.

However, introducing educational gerontology programs into high schools has several problems such as teacher training programs to teach gerontology, teacher's qualifications, and school curriculums.

Keywords : Elderly, High School Students, Educational Gerontology, Understanding of the Elderly  
キーワード : 高齢者、高校生、教育老年学、高齢者理解

本実践報告は、高等学校3校において、筆者が「高齢者を理解する」のタイトルで授業を実施し、高校生の高齢者に対する理解度及び高齢期に対する意識や価値観に関する特徴を明らかにすることで、教育老年学に関する授業を教育現場で実施することの意義について考察することを目的とする。

#### I. はじめに

内閣府の発表(2016年)によると、我が国の65歳以上の人口(2015年10月1日現在)は3,392万人

(女性1,926万人、男性1,466万人)を超え、100歳高齢者数も65,692人(2015年年9月1日現在)で過去最高の人数となり、この傾向は今後も続くと考えられる。2015年、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者は26.7%で国民の4人に1人超となり、2030年に31.8%で3.2人に1人、2060年に39.9%で2.5人に1人が65歳以上になると予測される。75歳以上の高齢者が総人口に占める割合も上昇を続け、2060年には26.9%となり<sup>1)</sup>、国民の4人に1人が75歳以上になるものと予測される。また、平均寿命は1935年の男性46.92歳、女性

49.63歳から、2015年に男性80.50歳、女性86.63歳と延びた。2060年には男性84.19歳、女性90.93歳になると予測され<sup>1)</sup>、我が国は世界のどの国も経験したことのない未曾有の超高齢社会を短期間で迎えることになる。そのため、日本国民の英知を結集した取り組みが求められている。

なお、65歳以上の高齢者のいる世帯数及び構成割合など高齢者を取り巻く環境も変化しており、単独世帯(独居老人世帯)が25.3%、夫婦のみの世帯30.7%<sup>1)</sup>で、異世代間交流は希薄になりつつあるのが現状である。

このような状況の中で、全国の小学校、中学校、高等学校において、高齢者あるいは老化に関する正規の授業を実施している実践例の報告はみられない。学習指導要領(高等学校)では、保健(保健体育)の「生涯を通じる健康」と生活と福祉(家庭科)の「高齢者の自立生活支援と介護」などで指導することが示されており、授業の中で単元の一部として取り扱っている。そのため、将来、生徒が迎える高齢期、正しい老化の過程を理解させる取り組みは、十分とは言えない状況である。

このように、我が国においては、高齢者に関する学習や異世代間交流の機会が少なく、高齢者や高齢期について学ぶ機会が少ないのが現状である。

国内の大学では、老年医学の講座が全国80の医科大学あるいは医学部の約4分の1で開設されている。学際的な学問としての老年学は、大学院レベル又は学部レベルでも講座あるいは研究科としての開設は少ない<sup>2)</sup>。現在、高齢者や老化に関する講義科目を設置している大学は桜美林大学のみで、修士課程及び博士課程を設置し、老年学の領域に従事する研究者や実践家を養成している。2010年、東京大学ではジェロントロジーセンターを設置し、大学院レベルで学際的な老年学研究をスタートさせている。

一方、米国においては、1965年にThe Older Americans Actが通過して学際的な老年学教育が開始された。現在、学部課程が31大学、修士課程37大学、博士課程5大学で老年学部が設置されている。1964年、南カリフォルニア大学に米国退職者協会の寄付金でアンドラス・ジェロントロジーセンターが設立され、1975年に大学院を創設

し、1989年に博士課程も設置した。現在、学部課程、修士課程、博士課程を設置し、老年学教育及び研究の最先端で、世界の老年学に関する研究を牽引している。

また、米国老年学協会、その傘下にある高等教育老年学協会、北テキサス大学を拠点とする全国高齢化教育学習学会の設立により、大学のみならず、幼・小・中・高校で高齢者や老化に関する教育を生涯学習という視点に立って学ぶ機会が提供されている<sup>2)</sup>。

高齢期は、生き続ける限り誰もが経験する重要なライフステージである。しかし、老化の過程を生涯発達の視点から捉えることの機会が不足している。実際、高齢者イコール衰退というイメージが先行する中、正しい老化の過程を学ぶことは十分とは言えない状況にある。このことが、高齢者に対する差別や偏見を生み出す要因ともなっており、自分自身の高齢期というライフステージにおけるQOLにも少なからず影響を与えているものと考えられる。柴田(1999年)も、「老年学は加齢学や高齢者に関する問題のみでなく、むしろ生涯発達理論や世代間問題をも研究する学問といえよう」と述べている<sup>3)</sup>。このことは、老年学の必要性和重要性を示唆しており、教育現場においても教育的視点に立って老年学を学ぶことの意義は十分あると考えられる。

しかしながら、教育現場においては、高齢者や高齢期について十分な教育の機会が与えられていない。幼児児童生徒に生涯発達の視点を踏まえ、高齢者及び高齢期について考える機会を提供することは重要である。つまり、彼ら自身の人生そのものについて考えることで、現在から将来を見据えることができるからである。教育老年学は、老いの価値を探求し、教育を通して人生の完成期を見据える学問である。<sup>3)</sup>このことは、現時点からの延長線上にある自分自身の将来について、対話を重ねるための創造性を養成する機会であると考えられる。

このように、高齢者や高齢期に対する理解の深化は、超高齢社会を生きる児童生徒にとって有益である。そのため、教育老年学の導入の可能性を示唆を与えるものと考え、今回の授業を実施した。Lichtenstein 他(2005年)は、中高校生はエ

イジングに対して強いイメージが形成されているのではなく、高齢者や老化に関する変化についても誤った考えが定着することはないため、老化や健康増進について教育することに適した時期である、と述べている。<sup>4)</sup>Dobrosky と Bishop (1986年) は、人生の早い段階で学んだ態度は、私たち自身及び他人に対する考え方や言動に大きな影響を与える、と述べている。そのため、早い段階で高齢者や正しい老化の過程を学ぶことは、実際の老化のプロセスが多様性に富んでいることや個人差が大きい点においてのみ考えとしても大変価値がある。つまり、発達段階が早ければ早い段階にあるほど、正しい老化のプロセスを理解することにつながり、意味がある。<sup>5)</sup>

従って、本稿は授業や高齢者に関するアンケート調査の実施を通して、高校生の高齢者や高齢期に対する興味・関心の把握及び高齢者に対する理解度を明らかにすることにある。また、そのことで、教育現場において、生徒が正しい老化の過程と高齢期について学ぶことのできる、教育老年学の導入の可能性についても検討する。

## II. 教育老年学について

教育老年学とは、「高齢化と生涯学習の問題を、エイジングと成人の学びとを、より根本的な次元から結びつける新しい学問分野である。それは、高齢者への生涯学習という枠組みを超える体系でもある。老いの価値を探る学問でもある。教育という視点から人生の後半部を見つめる学問でもある。」<sup>6)</sup>

つまり、教育老年学とは生涯発達と生涯学習をクロスさせた学問であり、老化を生涯発達の視点から見つめる学問であると言えるのではないだろうか。

また、教育老年学を授業として設定する理由について、次のように捉えることができる。

- ①高齢期を生涯発達の視点から捉えることで、高齢期そのものが単独に存続するのではなく、現在の延長線上にあることを理解する機会となる。そのことで、将来に備えて、今何をすべきか、どのような人生設計をするのか、人生の意義等について考える機会とすることができる。

- ②超高齢社会に生きる一人として、広い視野で社会の実態を捉えることを通して、自分自身の高齢期や地域社会の高齢者についても考え、かつ正しい老化の過程を理解することができる。

- ③キャリア教育の視点に立ち、将来経験するライフイベントを正しく捉えることで、将来の進路及び職業選択に役立てることができる。

なお、教育老年学の授業を実施することによる成果について、次のように捉えることができる。

- ①高齢社会、高齢者及び高齢期の特徴について、理解を深化させることができる。
- ②高齢期を正しく理解することで、高齢期に対する不安を軽減し、高齢者に対する差別や偏見をなくすことができる。
- ③人生の意義や価値観及び生きることの意味について考えることができる。
- ④正しい老化のプロセスと生涯発達の完成期としての高齢期を理解することができる。

## III. 実践方法

授業対象者は、沖縄県南部地区、那覇地区、中部地区内の普通高校A校とB校の1年生、C校の2年生で、A校38名(男性22名、女性16名)、B校40名(男性17名、女性23名)、C校30名(男性14名、女性16名)である。実施時期は、A校が平成23年3月、B校平成23年10月、C校平成28年2月であった。

高等学校で計画している教育老年学のシラバスは、資料のとおりである。(資料1参照)

今回は、シラバスの授業計画の第1回目を改変し、次のとおり実施した。

### 1. 高齢者理解度アンケート調査

調査項目は、基本属性及び高齢者の理解度に関するものとした。基本属性は、①性、②学年、③高齢者と同居の有無などであった。高齢者の理解度は①65歳以上の高齢者の大多数は認知症(記憶が落ちたり、ボケたりする)である、②高齢期では耳や目などのいわゆる五官が衰える傾向にある、③ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない、

④高齢期では心肺機能(肺活量)が低下する傾向がある、⑤少なくとも高齢者の10名中1人がナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している、⑥高齢者のドライバーは65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない、⑦ほとんどの高齢者は若い人ほど効率よく働くことができない、⑧高齢者の約80%は通常的生活行動ができる十分は健康状態にある、⑨ほとんどの高齢者は自分自身の考え方に固執しており柔軟性がない、⑩ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある、⑪大多数の高齢者は、社会的に孤立しており孤独である、⑫高齢の労働者は、若い労働者と比べて事故が少ない、⑬大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない、⑭大多数の高齢者は何らかの仕事に従事している、又はしたいと思っている、⑮高齢者は年齢とともにより宗教に興味・関心が高くなっていく、であった。

## 2. 高齢者に対するイメージ

アンケート調査用紙を回収後、全員に黙想してもらい、自分自身の65歳の生活の様子を想像してもらった。その後、数名の生徒の感想を共有した。結果は、高齢者に対する肯定的及び否定的なイメージに分類することができた。肯定的な意見としては、「家族と一緒に楽しく過ごしている」、「自分の好きなことをして楽しそうである」、「友人と一緒に運動している」、「健康で孫と一緒に遊んでいる」、などであった。一方、否定的な意見としては、「一人でテレビを観ている」、「そばに誰もいない」、「施設で寂しそうである」、「耳が聞こえない」、「自分そのものがない」、などであった。自分自身の高齢期を想像するイメージは、現在の高齢者に対するものであると考えられていることから、これまでの生活環境や高齢者との交流体験が影響しているものと考えられる。

## 3. 高齢者の価値(若者の価値)

「あなたは、次の条件で明日から65才の高齢者になることを受け入れることができますか。」という問いで、高齢者を受け入れることの是非を確認した。

- (1) 年収が、3億円保証されている。
- (2) 65歳から平均寿命までの余命を健康で過ごすことが保証されている。
- (3) 衣食住も保証されている。
- (4) 夫婦や家族関係も円満であることも保証されている。

上記の条件で、3校とも数名の生徒が高齢者になることを受け入れることに同意した。その主な理由は、「自分の好きなことが何でもできるから」、「自分の好きなものが何でも買えるから」、「楽しそう」、「いずれ年をとるから」などであった。大多数の生徒は、明日から高齢者になることに難色を示しており、若者としての価値そのものがいかに高いものであるのか、経験したことのない高齢期に対する不安などについて理解することができる。

## 4. 日本の全人口に占める高齢者及び後期高齢者の割合

日本の高齢化率は、現在26.7%である。彼らが高齢期を生きる2060年には高齢化率が39.9%で、2.5人に一人が65歳以上の高齢者となることは、43年後に60歳を迎えた彼らが税金などの経済的負担がいかに大きいのかを予測させるものであり、自分自身の問題として捉えることの重要性を伝えた。将来、彼らの多くが祖父母、父母、子ども達、そして自分自身の生活を支える経済的負担を強いられるサンドイッチ世代を経験することになる。

## 5. 先進地域、開発途上地域、アジア地域の高齢化率(資料の提示のみ)

## 6. 高齢者理解度の結果と説明

アンケート調査用紙を回収後、質問項目の確認と回答及び解説を行った。

この活動は、事前にアンケート調査を実施し、結果の分析を行い、実際の授業においてはグループ活動として討議を行い、発表することでさらに内容が深まるもので考えられる。

## 7. 健康そうに見える60歳以上の男性著名人の紹介(例、加山雄三、高橋英樹など)

## 8. 授業で学んだことの内容や授業を受けての感想の共有

生徒の主な感想は次のとおりである。

- (1) これまで、自分が高齢者になることはあまり考えたことがなかったので、自分自身のこととして考える機会になりました。
- (2) これまで自分が考えていた高齢者の様子が異なっていたので驚きました。
- (3) このように高齢者のことについて研究する専門があることを知らなかったです。
- (4) 高齢者が考えた以上に健康であることがわかりました。
- (5) 高齢者の多くが、施設などに入所しているかと思いましたが、地域で生活している高齢者が多いということが勉強になった。
- (6) 高齢者は、普段どのような生活をしているのか疑問であったが、生活の様子がわかりました。
- (7) 2050年に高齢者が多くなり、平均寿命の90歳以上になることがわかって驚いた。
- (8) 高齢者になっても性格がそれほど変化しないということがわかった。
- (9) 短い時間だったのですが、楽しく教えていただきました。短かったので詳しく聞けなかったのですが、もっと詳しく聞きたいと思いました。
- (10) ケース Study の内容と〇〇先生の質問はとても考えさせられました。特に、自分が同じような境遇になった場合の対応は、自分は、最後まで面倒を見る。立場によるけれど、この質問には明確な答えはないと思いました。一応理由をあげると、「その人を好きで結婚したなら、たとえそんな状況になっても最後まで好きでいる」のが正しい判断だと思ったからです。
- (11) 65歳以上(高齢者)になった後の過ごし方(を考えることができました)。
- (12) 老化について全然知っていなかったということが分かった。今も大切だが、老後も考えていきたい。
- (13) 今まで、老後のことなど深く考える機会がなかったのでとても面白かった。自分の老後を考えながら、社会に役立てるような大人に

なりたいと思った。

- (14) 老年学を初めて聞いてみて、学問には本当に多くの分野があるのかと思いました。高齢者に着眼して研究する学問と聞いたとき、最初はまいちピンとこなかったのですが、聞き、考えいくととても興味深いと感じました。
- (15) 高齢者になるといろいろハンディもあって大変だなと思っていただけ、老後を楽しく生きることでもできるんじゃないかと考え方が少し改まったと思いました。正しい知識と柔らかな考え方を身につけて深く美しい高齢者になりたいと思いました。
- (16) 今回の話を聞いて、高齢者に対するイメージが変わりました。自分の老後をより良いものにしたいと思いました。
- (17) 高齢者は、自分が思っているより、ボケたり、辛い思いをしているわけではないんだ、と思いました。たしかに、病気がちになってしまったりすることもあるけど、それでも、好きな時間に好きなことができるって良いことだと思うので、自分も良い老後を過ごせるようにしたいと思う授業でした。

## V. 高齢者理解度アンケート調査の結果

「高齢者理解度」については、各質問項目に正解はT、誤答はFで記載し、回答してもらった。

これらの質問は、高齢者に対する理解度を確認しすることで、差別や偏見の要因等を推測及び検討する上から、重要であると考え実施した。質問項目と結果は、表1のとおりである。

本調査の結果は、アンケート調査の実施計画や対象者の年齢など基本属性が研究を目的としたデータが収集されていないため、先行研究との厳密な比較はできないが、今後の研究計画のために概要を把握することができる点において有益である。高齢者に対する考え方は、教育的介入がないと生涯を通して変化が少ないとも考えられ、かつ年齢が若いほど高齢者に対して客観的な考えを持つ傾向にあるといわれている。

先行研究において、日本の中高年者は米国の対象者よりもはるかに強い老人差別をもっているが明確にされている<sup>2)</sup>。今回のアンケート調査結果

も、高齢者が十分に理解されているとは言えず、教育的介入が必要な結果となっている。

実際正答率は、A高校が計52.1%（男性51.0%、女性53.8%）、B高校が計62.3%（男性60.81%、女性63.5%）、C高校が計61.5%（男性51.5%、女性63.1%）で、3校とも女性の正答率が男性よりも高くなっていった。B高校とC高校の正答率に大きな違いはないが、両高校とA高校の正答率に差がある。その要因について分析することは、高齢者理解のための実行プラン等を計画する上で有益な

ヒントを得ることができると考えられる。

これまでの先行研究においても、女性の回答率が男性を比較して高くなる傾向が報告されるが、今回も同様の結果となっている。

各質問に対する正答率は、3高校で質問2、4の2項目において80%以上、質問5、6、7、12、の4項目では50%以下であった。各高校では、A高校で質問2、4の2項目において80%以上、質問1、3、5、6、7、8、9、12、13の9項目では50%以下であった。B高校では質問2、4、10、14

表1 加齢の事実をめぐる Palmore のクイズと正答率

番号		A高校			B高校			C高校		
		男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
1	65歳以上の高齢者の大多数は、認知症（記憶が落ちたり、ボケたりする）である。	45.5	31.3	39.5	70.6	78.3	75.0	71.4	82.4	77.4
2	高齢期では、耳や目などのいわゆる五官が衰える傾向にある。	100.0	93.8	94.9	100.0	100.0	100.0	100	100	100
3	ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない。	36.4	31.3	34.2	58.8	73.9	67.5	64.3	70.6	67.4
4	高齢期で、心肺機能（肺活量）が低下する傾向がある。	95.5	87.5	92.1	88.2	87.0	87.5	100	98.2	96.8
5	少なくとも高齢者の10名中1人が、ナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している。	45.5	43.8	44.7	47.1	52.2	50.0	50	41.2	45.2
6	高齢者のドライバーは、65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない。	4.5	18.8	10.5	29.4	43.5	37.5	21.4	29.8	25.8
7	ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働くことができない。	27.3	68.8	44.7	23.5	39.1	32.5	42.9	47.1	45.2
8	高齢者の約80%は、通常的生活行動ができる十分な健康状態にある。	40.9	62.5	50.0	58.8	52.2	55.0	50	35.3	41.9
9	ほとんどの高齢者は、自分自身の考え方に固執しており、柔軟性がない。	31.8	31.3	31.6	58.8	56.5	57.5	35.7	53	45.2
10	ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある。	81.8	68.8	76.3	88.2	91.3	90.0	71.4	88.2	80.6
11	大多数の高齢者は、社会的に孤立しており、孤独である。	59.1	78.4	57.9	70.6	60.9	65.0	71.4	76.5	74.2
12	高齢の労働者は、若い労働者と比べて職場での事故が少ない。	40.9	27.0	36.8	41.2	47.8	45.0	35.7	29.8	32.3
13	大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない。	36.4	51.4	36.8	41.2	34.8	37.5	50	58.2	54.8
14	大多数の高齢者は、何らかの仕事に従事している、又はしたいと思っている。	77.3	86.5	73.7	70.6	87.0	80.0	78.6	70.6	74.2
15	高齢者は、年齢とともにより宗教に興味・関心が高くなっていく。	40.9	59.5	55.3	64.7	47.8	55.0	64.7	70.6	61.3
合計平均		51.0	54.1	52.1	60.8	63.5	62.3	51.5	63.1	61.5

注：奇数番号は誤答、偶数番号が正解

出典：Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH, 1988, p.423

の4項目で80%以上、質問5、6、7、12、13の5項目では50%以下であった。C高校では質問2、3、10の3項目で80%以上であった。

性別では、A高校の男性が質問1、4、10の3項目に80%以上、質問1、3、5、6、7、8、9、12、13、15の10項目では50%以下であった。特に、質問6と7の2項目では4.5%と27.3%であった。一方、女性は質問2、4、14の3項目では80%以上、質問1、3、5、6、9、12の6項目では50%以下であった。特に、質問6と12の2項目では18.8%と27.0%であった。

B高校の男性が質問2、4、10の3項目では80%以上、質問5、6、7、12、13の5項目では50%以下であった。特に、質問6と7の2項目では29.4%と23.5%であった。一方、女性は質問2、4、10、14の4項目では80%以上、質問6、7、12、13、15の5項目では50%以下であった。

C高校の男性が質問2、4の2項目では80%以上、質問5、6、7、8、9、12、13の6項目では50%以下であった。特に、質問6では21.4%であった。一方、女性は、質問1、2、4、10の4項目で80%以上、質問5、6、7、8、12の5項目では50%以下であった。

## VI. 考察

高校1年生及び2年生の高齢者に対する理解度及び高齢期に対する意識に関する特徴について考察する。

高齢者の理解度調査の内容である高齢者の身体的及び精神的機能の現状に関する質問において、高齢者の現状については十分に理解されていないことが考えられる。正答率が合計でA高校が52.1%、B高校62.31%、C高校61.5%で、それぞれ47.9%、37.7%、38.5%が誤答であることから、高齢者について正しく理解されていないと考えられる。この結果は、高齢者に対する偏見や差別意識を助長する要因と関連することも考えられる。男女比においては、A高校で男性50.1%と女性54.1%、B高校で男性60.8%と女性63.5%、C高校では男性51.5%と女性63.1%であるが、このような回答率は、これまでの先行研究においても、同様の結果となっている。例えば、平成21年8月、琉球大学の学部学生に実施した調査にお

いても、男性63.2%、女性69.3%であった。また、Donatelle (1988)によると、米国の調査結果では、学部学生の正答率は65%、大学院生80%、大学教官90%である<sup>7)</sup>。このように、教育水準が高くなるにつれて、正答率も高くなる傾向にあると考えられる。今回授業を実施した3校は高校で、正答率は高くないものの、男女間や学校間における正答率の差など今後の研究に役立つ興味深い結果がみられた。

最初に、A校の正答率が52.1%、B校の正答率は62.3%である。この差の背景要因はどこにあるのか。そのことを明らかにすることは、高齢者理解教育を高校でどのような内容で進めていくことが効果的であるのかについて、何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。羽鳥(2005年)は、青少年期から、祖父母など高齢者とより良い関係を構築し、高齢者に対する肯定的イメージが定着することになり、交流との交流回数が多くなることは、偏見を是正する効力につながる、と述べている。<sup>8)</sup>

次に、各質問の正答率における特徴を考えてみたい。質問2と4の2項目における正答率は80%を上回っており、「高齢期では、耳や目などのいわゆる五官のすべてが衰えがちである」と「高齢期では、心肺機能(肺活量)が低下する傾向にある」など、病気や身体面の老化など生理的側面については、概ね理解されていると推測される。しかしながら、他の心理的側面、効率性・適応、社会状況的側面に関連する13項目では正答率が80%を下回っている。

このことから、小学校、中学校、高校において、学習及び異世代間交流の機会を通して、正しい老化の過程や高齢者の実態を学ぶ必要があると考えられる。特に、質問6において、正答率が40%以下となっており、最近の認知症など高齢者による交通事故の多発による影響もあるが、健康な高齢者の実態など社会学的な領域からのアプローチが必要であると考えられる。質問13においても、合計正答率がA高校36.8%とB高校37.5%で、「大多数の高齢者が貧困である」と考える傾向にあるものと推測される。

他府県高校生と比較した結果はないものの、このような傾向は、柴田(2000年)や堀(1999年)が

実施した研究でも同様な傾向となっている<sup>3) 6)</sup>。このことについて、柴田(2000年)は、老年学の研究が熟していない時期において、社会の中で支援ニーズの高い障害や貧困者等の高齢者にのみが注目されるので、偏見が生まれやすい環境にある、と述べている。このことは、社会が成熟し、教育の機会が提供されることで正しい老化の過程が理解され、かつ高齢者の実態が明確となり、高齢者に対する差別や偏見がなくなることを示唆するものと考えられる。

将来、多くの人々が経験する高齢期や高齢者について、人生設計というキャリア教育の視点からも促えることが大切であり、人生の早期段階で高齢期について理解するための教育の機会が必要ではないだろうか。そのような取り組みの中で、異世代間交流が鍵を握るものと考えられる。堀と大谷(1995年)は、大学生と高齢者の高齢者への偏見に関する研究で、偏見形成の過程においては、テレビなどマス・メディアなどの間接的な影響力よりも、高齢者との実際の接触そのものが高齢者への偏見是正に大きな影響要因になると、述べている。<sup>9)</sup>

高校生や大学生など若者が高齢者との交流を通して、学ぶことの意義は何であろうか。堀(1999年)は、①高齢者の多くが職業や人間関係などをはじめとする知識や技能に関する教育プログラムに寄与する専門的知識に精通していること、②学習を普段の生活の中で応用していく能力に優れていること、③高齢者には多くの経験があり人生の価値など人間が生きる上で大切なことを理解している、の3点を挙げている。<sup>6)</sup>

一方、高齢者が若者から学ぶことに関して、堀(1999年)は、①高齢者に希望や冒険に向かう姿勢の喚起など高齢者が若者時代に有していた理想主義の復権、②新しいフロンティアの開拓など知的発見の感覚の更新、③未来感覚の回復などを挙げている。高齢者がこのようなことを踏まえ、交流を促進することで、若い世代の役割モデルとなる高齢者から人生で大切なことを学ぶことができるものと考えられる。

高齢者理解に関するアンケート調査の結果から、「老人になると肺活量が落ちる」や「多くの老人は若い人より反応時間が長い」など生理的側面

の偏見及び「多くの老人は社会的に孤立しており、また寂しいものだ」など心理的側面の偏見は弱いものの、「ほとんどの老人は若い人ほど効率よく働けない」や「65歳以上の車の運転者は若い人より事故を起こしにくい」など効率性・適応の偏見及び「老人の10人に1人は老健施設等で長期に暮らしている」や「大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない」など社会状況の側面に対する偏見が強いことが理解できる。今回の傾向は、大学生の調査研究結果と同様となっている。

また、高齢者に対する偏見形成過程について、堀(1999年)は、大学生を対象とした研究を通して、マス・メディアなどを介しての影響力よりも高齢者と実際に交流や接触があることが老化への理解を深め、偏見をなくすことを担っている、と述べている。<sup>10)</sup>同様のことが、高校生にも当てはまることの可能性を考えると、今後、高齢者施設などにおいて児童生徒と高齢者の交流促進、学校現場へ高齢者を講師として招聘することなど、高齢者を正しく理解することで、老人差別や偏見の解消に寄与することの可能性において検証する必要がある。正しい情報に基づいた老人観を育てるためにも、高齢期に関する教育の在り方が重要であると考えられる。

このような状況において、正しい老化の過程や高齢者の理解、高齢者に対する偏見や差別是正の観点から教育老年学を教育現場に導入することは、価値があるものと考えられる。そのことが、超高齢社会を迎え、多くの人々が高齢期を経験する我が国において、高齢期を経験することの過度の恐怖を和らげることに役立つものと考えられる。

また、高齢期に生涯発達の見地を取り入れることで、将来、現在の高校生が高齢者の仲間入りをする時、彼らの生活満足度や幸福感を高めることに寄与するものと考えられる。

しかしながら、教育老年学を学校現場に導入する際、課題が多いことも避けることのできない事実である。堀(2006年)は、教育現場における教育課程、指導者など従来の学校教育と一線を画していると指摘している。<sup>11)</sup>また、教育老年学も学部課程を修了し、かつ修士課程や博士課程で学ぶという現実、死生観を取り扱う生命倫理観など、人

生そのものを扱う見識を備えていることも求められるからである。羽鳥(2005年)は、高齢者に対する差別をなくするために、専門職はそれぞれの時代を生きる高齢者に関する正確な知識を身につけることを強調している。<sup>8)</sup>

いずれにしても、私達が高齢期を生きることは明らかであるが、このライフステージで生起する問題の多くは、高齢期で突然生起するものではない。高齢期は、現在から人生の延長線上にある最終ステージである、人生の統合期・完成期なのであるため、生涯発達の見点から人生そのものを捉える必要がある。

従って、今後も教育老年学を教育現場で導入するための努力を継続することに価値があると考える。

## 引用文献

- 1) 高齢社会白書(内閣府)：[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/sl\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/sl_1.html)  
入手日 2016年10月30日
- 2) 国際長寿センター：日本におけるジェロントロジー確立に関する報告書 2000.
- 3) 柴田博：アメリカ合衆国の老年学教育、老年社会科学、21(3)：358-371、1999.
- 4) Lichtenstein, Michael J, 他, Do Middle School Students Really Have Fixed Images of Elders? Journal of Gerontology, 60B(1), 537-547, 2005
- 5) Dobrosky, Barbara J., and Bishop, James M. Children's perceptions of old people. Educational Gerontology, 12, 429-439, 1986
- 6) 堀薫夫：教育老年学の構想－エイジングと生涯学習、ii、学文社、1999
- 7) Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH, p423, 1988, Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
- 8) 羽鳥美香、エイジズムと社会福祉実践：専門職の高齢者観と実践への影響、文京学院大学研究紀要、17(1)：89-100、2005
- 9) 堀薫夫、大谷英子：高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究、大阪教育大学紀要、44(1)：1-12、1995
- 10) 前掲書4) p140
- 11) 堀薫夫：教育老年学の展開、p31、学文社、2006

## 参考図書

1. Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH 1988, Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
2. 安藤進 他、老化のことを正しく知る本、東京、中央出版 2000.

【資料1】

## 「高齢社会と老年学への招待」シラバス

(1) 設置クラス：

(2) 定 員：

(3) 必修選択：

(4) 受講年次：

(5) 授業内容と方法

高齢社会、国際・情報化社会が進展する中、高齢社会と老化のプロセスを理解することは、生涯学習社会の構築を目指す上で、ますます重要なものとなっている。

高齢社会及び高齢期を理解する学問に、老年学がある。老年学とは、人間がどのように加齢変化していくのかについて医学、生物学、心理学、社会学的な領域から学際的に研究をする学問である。

この授業においては、教育老年学として社会学的及び心理学的な領域から正しい老化のプロセスを学ぶことで、高齢者や高齢期及び高齢社会について理解を深めることを目的としている。

本科目の授業内容は、高齢者及び高齢社会の定義及びその特徴、欧米における老年学の現状、老化理論、死の準備教育などについて多岐にわたる。すべての講義内容において、理論と実践の融合を目指し、「生涯発達」を共通のコンセプトとしてより学びを深め、演習することがねらいである。

(6) 目標達成

キャリア教育の視点から、老年学全般に関する興味・関心を高め、かつ理解を深めるとともに「人生の統合」について実践できる資質能力を身につける。

(7) 評価基準と評価方法

観点別評価を設定し、総合で60点以上。授業でのディスカッション及びプレゼンテーション、レポート等から総合的に判断する。

(8) 授業計画

第1回目 オリエンテーション(授業ガイダンス)

- ① 授業内容説明
- ② レポート作成とプレゼンテーションについて

第2回目 ① 高齢者に対するイメージについて

- ② 高齢者に対する価値観について

第3回目 高齢者の定義と特徴

第4回目 ① 少子高齢社会について

- ② 少子高齢社会の特徴と課題について

第4回目 ① 世界の人口について

- ② 日本及び沖縄の人口について

第5回目 ① ライフイベントについて

- ② (教育)老年学について

第6回目 老化理論

第7回目 寿命と老化について

第8回目 生涯発達から考える高齢期

第9回目 老いの意味

第10回目 老いの価値

第11回目 老年期の過ごし方

第12回目 サクセスフルエイジング

第13回目 死の準備教育

第14回目 講義のまとめと疑問点の共有

第15回目 グループ発表

(10) 教科書

調整中

(11) 備 考

詳細は、第1回講義の時(オリエンテーション)に説明するものとする。